昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可
昭和五十五年八月十五日発行（毎月一回・十五日発行）

慈光

第三十二巻　第八号
（通第三七四号）

目次

安楽集（下巻）……道綽禅師……(1)
近角常音先生聞私記……吉田延世……(2)
近角常音先生聞思記……花田正夫……(5)
信を行く旅人抄……池山榮吉……(8)
人生の課題……高千穂徹乗……(11)
御一代記聞書抄（続・一〇）……井上善右衛門……(13)
自照日誌抄（24）……西元宗助……(15)
念仏詩抄……木村無相……(18)
疾病と信仰(3)……花田正夫……(21)

安楽集下巻　道綽禅師

曇鸞法師の如きは、康存の日、つぬに浄土をおさむ。
またつねに世俗の君子きたりて法師を呵していわく。十方仏国みな浄土なり、法師なんぞすなわちひとりこころを西にとどむるや。あに偏見の生にあらずやと。
法師こたえて曰く。われすでに凡夫にして智慧浅短なりいまだ地位（菩薩のさとり）に入らず、念力ひとしくすべけんや。草を置きて牛を引くがごとく、恒にすべからく心を糟櫪（かいばおけ）につなぐべし。あにほしいままにして全く帰するところなきことをえんやと。
（禅師はこの碑文によって信心を決定された）

仝上

問うて曰く。浄土にうまれんとねがい、利物（利他）を欲するならば、所抜の衆生、今現にここに在り。ただまさにここに在りて苦の衆生を抜くべし。なにによりてか利他の心を得ながらまず浄土にうまれんと願うや。衆生を捨てて自ら菩薩の楽をもとむるに似たるおや。
答えて曰く。この義類せず、なんとなれば『智度論』に云うがごとし。
たとえば、二人ともに父母眷属の深渕に没在するを見る一人はただちにゆいて力を尽してこれを救わんとするに力およばざるところなれば、あいともにしずみぬ。一人ははるかに走りて一つの舟舶におもむき、乗りきたって近よりすくうに、ともに難を出ずることを得たるが如し菩薩もまたしかなり、もしいまだ菩提心をおこさざる時には、生に流転すること衆生と別なることなし。ただしすでに菩提心をおこす時は、先ず浄土に往生せんと願いて、大悲の船を取り、無碍の辯才に乗じて、生死の海に入りて、衆生をのせてさとりの岸にはこぶなり。

類一したがう　という意味あり

道綽禅師和讃　親鸞聖人

濁世の起悪造罪は　暴風駛雨にことならず
諸仏これらをあわれみて　すすめて浄土に帰せしめり
一形悪をつくれども　専精にこころかけしめて
つねに念仏せしむれば　諸障自然にのぞこりぬ
縦令一生造悪の　衆生引接のためにとて
称我名字と願じつつ　若不生者とちかいたり

近角常音先生聞私記

「虚誑の対治」

昭和十四年、四月、謹録。

○

兄貴が「あいつの我慢のやまんのが可哀想である」と人に愚痴をこぼしたことを兄嫁から聞き、あけくれ私のことを思いつめている親心を知って、仏の心の難思議をありがたいと思った。

○

自分のことは自分ではわからぬ。もうどうにでもなれとやけくそになっている私を、あけくれ心にかけて心配している、世にも変った人があるものと、有難いと思いました。
これが思いかけぬ有難いことである。広大なお慈悲である。絶体絶命のものに対してあけくれ見護って下さる親心である。

○

何時までたってもわからぬ、徹底しない。それだからわかるまでやりましようと思うことが我慢のやまぬ証拠である。

○

何事も徹底しないが、何時か何とかなるもののように思っている。これが我慢のやまんということである。

○

人間はいくら危篤に落ちても、本当に死ぬとは、死ぬが死ぬまで思わぬ。何とかたすかると思っているものである。これが我慢のやまぬことである。

○

これだから流転する。自力根性でお慈悲を聞くものだから、その内容は他力の姿ではない。かくて堕落していく。
かかる者を見捨てぬ五劫、兆載の御苦労である。

○

江州の御里に地獄菩薩の橋があるが、そこを渡る人は、皆地蔵さんの頭を踏んでゆく。

吉田延世

地蔵さんは頭を踏まれ〳〵それを悪く思わず、人々を渡してやる。これが思いがけない親心である。

○

よければよいとほめ、悪しければ悪いとそしりぞける。こうした世に、それにかまわず、お見すてないお方は、これが仏の清浄真実である。

○

いかなる大罪を犯しても、かくならねばならぬ業報であると憐れみ、いかに失敗するも、それにつけてお見捨てない仏の親心である。

白道について

昭和十三年六月十六日。

ある真面目な未亡人があった。自分としては「貞女は二夫にまみえず」との考えもあったが、かく思うものの、身よりの一人もない身を思えば、人生はたよりないと淋しがっていた

知人の某がその様子を見て「自分は妻に死なれ、八年間不自由をしている。是非来て世話をして下さい」と求婚していた。

その後、その人が病にたおれ、その人の姉が看護していたが、その未亡人に「この際是非来て世話をして下さい。そうして下されば、何程か私も本人もたすかることですから」と懇望したのである。

その姉の言葉に未亡人は心を動かし、自分の身を捨てて人を助け善をしようと決心し、再婚の話を亡夫の身内の者に話すと、「再婚しなければ生涯、生活を見るが、再婚するのであれば、この家に出入りせぬように」と言い渡されたが、大決心をして再婚し、何事もなく幸福にくらしていたのである。

こうして約一年すぎ、フトしたことから、その人の郷里に病妻と子供のあることがわかり、その未亡人は再び孤独の中に沈み、最早、覆水盆に帰らず、で、それかと云って正式に入籍しようとすれば、病妻と子供を追い出すことになり、煩悩の末、途方にくれて会館に来て、道を求め、どうしたらよいか方法をたずねたのである。その仲に入った友人もまた困り果てて共に同道して来たのである。

その時、私は云った

「まず自分自身、淋しい身をかこち、たよりなさに堪えられず、そうした濁った心に気付かず、善を為さんの、人を助けんのと、自分のよしと思う心に固着して、頑張っているのは、これが即ち我執我慢の心である。このような我執我慢のやまぬ者を憐れみ、お見捨てない親心、この親心が

即ち仏のお慈悲である。これを信ずることが何より大切である

さてその仏のお心に帰依したうえは、その家にとどまるもよし、病妻をたすけるもよし、又はその家を去るもよし、孤独をまもりながら、身にもつ業報にまかせ、唯仏の御めぐみにすがってこの世をすごすことが出来る、これが念仏無碍の白道である云々」

と答えました。

その後、その方は、意を決して、その病妻のもとに行き「私は実は何も知らずに結婚しましたけれど、最近になって、あなたがお病気で長年養生して居られることを知りいろいろ煩悶いたしました。

しかしその間、御病中の身として、どんなにか恨まれ、憎まれ、お苦しみをおさせ申したことでありましょうか。誠に申しわけありません。今となっておわびもできませぬ始末でありますが、せめてあなた様の心のすみますよう、一切をあなたの裁断におまかせして、去れと云われれば去り、止って女中として働けとあればそれもいたしましょう。またあなたのお看病なりをさせていただけばよろこんでさせていただきます。……」

と申し出られた。

病妻の方も、その申し出の微塵も偽りのなく、赤心を打ち明けての言葉に、大いに感動し「私は御覧の通りの病気で、主人の靴下一つも洗濯が出来ぬ身ゆえ、どうか家にとどまって、私に代って主人の世話をして下さるように」との思いもかけぬ寛容な言葉にふれ、一つの道がひらけてきたのである。

これ仏のお真実一つにやすらぎ、身は如何ようになろうとも一切を業報にさしまかせるという無我な心に、行方を閉ざした闇黒の世界に光明がさしたのである。

（求道会館　に於いて）

近角常音先生聞思記

花田正夫

Nさんは大分県の人であったが、形式的仏教にあきたらず、青年の頃東京に出て、救世軍の街頭演説を聞いて非常に感動し、キリスト教に帰依して植村牧師に師事し、その没後は内村鑑三師に洗礼をうけた。そして自分は実業界で働き、月々収入の何割かを献金してキリスト教のために真面目に尽そうと決心した。

しかし長男の誠君は、キリスト教を奉じながら煩悶に落ち、或日内村師を訪ねて苦しみを訴えた。ところが師は

「修養不足のためである。もっと聖書を研究せよ」

と、誠君はこれを聞いて大いに失望落胆して淋しく帰宅した。

ところが、米国帰りの渡辺という人がたまたまこのことを聞き、見かねて「近角先生の会館に行きなさい」と紹介した。同君はそれから会館に来て聴聞し、仏のお慈悲に接し、内村師に見放された淋しさ身も、ここに大満足するようになった。

たま〳〵幼年学校に入って病気した弟があったが、その病の篤くなって、兄常観の話をきき、大満足して念仏往生を遂げた。

かくて氏の妻や子は皆仏教信者となって、氏の許しを得て、家の片隅に仏壇を祭り朝夕礼拝していた。

氏は四十年来の真面目なキリスト信者であったが、最も苦しみ悩んだのは、善悪のことであった。「絶対に善いことはせねばならぬ、それなのにそれが出来ない」という苦悶であった。しかも氏の子女が、故あって離縁になって帰ったのである。これについて「どうしてこうした不幸がおきたのであろうか、神の恵みということからは、こんなことがある筈がない。これは自分の信仰の不徹底のためである」と苦しんでいた。

こうして還暦を迎えた時、フト自分のやってきた月々の献金のことを振り返って見た。それで教会の建設やら、牧師の養成等々は出来たけれど、はたして献金してそういうことをすることが本当によいことであろうか。現に自分の家に出入りする教会関係の人々は、争うて金銭を求めてばかりいる。自分は献金によって返って教会の人々を腐敗させたように思える、と、ここに自分が善いと思っていたことに対して疑問を持ちはじめたのであった。

こうしたNさんの眼に、純粋なキリスト信者としては内村師だけだと尊敬していた。その内村師もすでに大病で死を前にして居られるときき、とにかく、今までやった行為があやしくなると共に、信仰心までがゆらぎ出したので、病床を訪ねて、最後の教を受けようと決心した。

やがて内村師の枕頭に坐ったNさんは

「内村先生、私は多くの基督者の中で、先生お一人を信じて居りますが、先生程の信者であるから、もう死の近い今、天国の音楽が聞こえますでしょう！」

とたずねると、真面目な内村師は、顔をそむけて

「まだ聞こえません！」

とのお答えであった。

このことがNさんの最後の頼みの綱をプッツリと切断して、四十年来の信仰心は崩れてしまった。その精神的な衝撃がはげしく、それからは病床に就いてしまわれ、ひどいことには、糞・尿のたれ流しという非常な病状になった。

丁度その頃、求道会館で熱心に聴聞していた洗張り屋の浅井君が、仕事のことでNさんを訪ねると、奥さんが、「浅井さん、主人が日に幾回となく糞・尿のしくじりをする病気になって、今もその始末をしたばかりです。あまりにひどいので、お尻を叩いて、あんたは聖書を右手に掲げてやって来たが、そのなれの果てがこの始末ですか？とつい愚痴をこぼしたばかりですよ。すると主人はにがい顔をして、そむけて居りました」

との打明け話をされた。これを聞いた浅井君は、早速会館へ来て、兄にそのままを報告すると、兄が涙をためて

「それはNさんは可哀想である。四十年来の信仰は砕け、そのうえに家内からも責め立てられては、血の涙であろう。奥さんもヒドイ、かみしもたれ流しとは云え、それは病気のせいなのに……」

と云いますと、浅井君は再びNさんの宅を訪ね

「奥さん、々々、今近角先生に今日の話をしたら、先生が涙を浮べられて〝それはNさんは気の毒だ〳〵〟とくり返されました」

と話していると、病室のふすまを一寸ほど開けてNさん

が、「近角さんが、Nは可哀想と云って涙を流してくれましたか……」
と、両眼に一杯の涙をたたえての御礼であった。

其後、浅井君が再びN家を訪ねると、奥さんが
「浅井さん、々々。世にも不思議なことがあるものです。あんたが来てくれてからパッタリと主人の上下のたれ流しが止ってしまいました。それから浅井さんが来られたら主人が会いたいと云って居ります。」
とのことで、病室に入ると、御主人が念仏して居られる
「浅井さん有難う。実は、近角さんが、家内でさえ呆れはてる私のことを聞いて、可哀想であると涙を流して下さったと知らされて、非常に嬉しかった。そして仏教信者の近角さんにそんな親切があるのだから、全世界に信者を有する基督教の聖書の中には、さぞそういう親切な言葉があるに相違ないと、毎日々々繰り読みして探し求めた。しかし私には見つからない。とうとう念仏申すようになった。近角先生に呉々もよろしく御礼を云って下さい」
とのことであった。

おもうに、兄が、浅井君からN氏の苦悶を聞いた時、自分自身の二十九歳の頃の狂人同様な大煩悶の経験があるので、思わず「Nさんは可哀想だ！」と涙したのであるが、その涙が、そのままN氏の心にとどいたのであった。この涙こそ、兄貴が四十年間、説いて〳〵説きつくせないものであった。

昭和十八年夏、名古屋、衆善館にて聴記。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

常音先生の歌

このこころこれを阿闍世とのたまいて　見捨てじという
み慈悲なりしか

よしあしはひとにはあらん　大悪の阿闍世われには　よしあしはなし

常観言
「またやりそこない、またやりそこない、
それだからおあきれないお慈悲でないか

常音記

信を行く旅人抄

池山榮吉

先年私が岡山に居りました頃、大阪の婦人で信仰を求めつつあった人が、私を訪ねて来られた。一応何か話をした後、その人の帰る時、これをよく読んでごらんなさいといって、歎異抄を渡しておいた。四五日してからまたその人が来られて「私は数年来たびたび聞法の席に出ましたが、どうしても念仏が出ませんでしたのに、先日お話を承ってから、ようよう出るようになりました」とのことで、そのわけを聞くと「この三四日というものは、専ら歎異抄第一章をくりかえして読んでるうちに、自然と念仏が称えられるようになりました」というのです。

とにかく念仏が出るようになったときいて、私も一応喜びはしたものの、なんだか心もとない、ちとあやしいと思ったのですが、その後の様子をきくと、果して本統の信心になっていない。称えるということにイヤに力味のはいった念仏であったのでした。それはそのはず、内的体験と呼応しての信楽の開発ではなく、第一章の文句を型として、それにはまろうとするはからいにすぎなかったのです。

その人はその後ながらく、その型から出ることが出来なかったようでした。『真実の信心には必ず名号を具す、名号は必ずしも願力の信心を具せず』とあるように、本統の信心がいただければ、念仏は出ずにはいられない。念仏が出ないようでは、てんからお話にもならないが、念仏が出るからといって、すぐそれでいいのだとは断定出来ない。念仏には、ややもすると意識的、無意識的に、なにかとはからい心がつきやすいものです。そうした間は称えるのになかなか骨が折れる。また称えてもさっぱりありがたみがない、むしろ苦行でもするような感じがする。

弥陀の名号となえつつ　信心まことにうるひとは
憶念の心つねにして　仏恩報ずるおもいあり

このおもいが伴わない念仏では充分でないのです。憶念の心というのは、第十六章にあるように『ただほれぼれと弥陀の御恩の深重なること、つねにおもい出しまいらす』

こころであります。

親鸞聖人がよきひとの仰せを信じられた刹那、全心身にきざまれたことばは『弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり、さればそくばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんと思召したちける本願のかたじけなさよ』という聖人の御持言であります。これが、憶念の心であります。このかたじけなさの思いに湧く念仏がほんもので、自分の称えることに価値をつけて、或目的達成のためにする念仏は、にせものであります。所謂、自力の称念としてきらわれるのです。何のはからいもまじわらない、順彼仏願、すなわち、本願に相応した、如来の選びにえらばれた本願の心に順応したのでないと、真実信心の念仏とは云えないのです。

『選択の願心』ということについては、いずれくわしくお話する機会もありましようが、今はただ法然上人の選択集の一節を引用しておきます。

『もしそれ造像、起塔をもて本願となせば、すなわち貧窮困乏のたぐいは定めて往生の望みを絶たん。然るに富貴の者はすくなく、貧賤の者は甚だ多し。もし智慧高才をもて本願となせば、愚鈍下智の者は定めて往生の望みを絶たん。然るに智慧あるものはすくなく、愚痴の者は甚だ多し。もし多聞多見をもて本願となせば少聞少見のともがらは定めて往生の望みを絶たん。然るに多聞の者はすくなく少聞の者は甚だ多し。もし持戒持律をもて本願となせば、破戒無戒の人は定めて往生の望みを絶たん。然るに持戒の者はすくなく、破戒の者は甚だ多し。自余の行もこれになぞらえてしるべし。

まさにしるべし。上の諸行等をもて本願となさば、往生を得るものはすくなく、往生せざる者は甚だ多し。しかれば、即ち弥陀如来、法蔵菩薩の昔、平等の慈悲に催うされて、あまねく一切を摂せんがために、造像起塔の諸行をもて往生の本願となさず、ただ称名、念仏、一行をもてその本願となすなり』

往生極楽の行を定めるについて、老少善悪をとわず、一切の罪悪深重、煩悩熾盛の衆生を救わんため、布施、持戒、忍辱、精進から、孝養父母、奉事師長までを選み捨ててただ念仏だけを選みとって下さったのが、如来選択の願心でありまして、このお心が、内、肝に銘じ、髄に徹って、外、声に出たのが、『ただ念仏』なのであります。

親鸞聖人が『自信教人信』自らも信じ、人にも信じさせたい、自分の体験を人にも得てもらいたいと望まれるのはこのただ念仏の一つであります。それで、わざわざ関東からたずねてきた同行にむかっても「あなたがたが、東の空からはるばると都にのぼって来られたのは、救いの道を聞こうがためであろうが、私はただ念仏のほかなんにも知らない。めずらしい法文でも知りたいなら、奈良や叡山あたりの学問にすぐれたかたがたにおたずねなさるがよい。私はただ師の仰せをそのまま信じているだけなのです」とただこう仰せられたのであります。

ところでさて、みなさんはどうですか？　聖人の仰せに共感して、そのままお信じになることはできませんか？『このうえは念仏をとりて信じたてまつらんとも、またすてんとも面々の御はからいなり』

聖人は決してわるずすめはなさいません。一寸聞くと縁なき衆生は度し難しと、軽く突き放されたような、情のうすい仕打とも感じられるようですが、聖人のこの思い切りのよい言葉の裏には、一方に、自分のはからいで人に念仏を申させることは出来るものでないという確信と、他方、弥陀の御催しのお手篤さの期待があるからです。丁度『地獄におちたりとも更に後悔すべからず候』という思い切りのよいお言葉の裏に、一方『地獄は一定すみかぞかし』の確信と、他方弥陀の御はからいにまかせまつる心安さがあるのと同じように！

おたがい、どうぞこの聖人の御期待を空しうしまつらないようにしたいものであります。

池山先生の挽歌　　鎌田　晃

尊しや　いまはのきはの　わが恩師　笑顔たたへし
ことをしのべば

苦しみの　なかより今日は　南無仏と　称へられきと
師はのたまへり

信仰は　時と処を　超えさする　尊きをしへ　師に知らされき

聖人と　七百年を　へだつれど　会はれうるぞと
師はのたまへり

みさとしを　いまはのきはに　垂れたまう　深きえにしに　涙こぼるる

人生の課題

高千穂　徹乗

私は声帯ガンという珍らしい病気で大手術をうけましたが、そのあと十七年もいのち長らえて、今日まで元気に年月を重ねてきましたことは、業苦のなかに、いよいよ深くご本願の広大なことを知らせていただくためであると感じております。

このごろは、ガンや高血圧のために死ぬ人が非常に多いようですが、これらの病気は身体にいたみを感ずることがないので、治療がておくれになるために、気がついたときは、すでにむつかしい病状になっているのであります。ガンは早く発見して手あてをすれば全治するのですが、痛みがないので、手おくれになるまで、ほっておくために死亡する人が多いのであります。自分の病気が進んでいることに気がつかずに、素人のはからいで細工をしているところに、大きなつまずきがあるのです。

宗教というものは、私たちの心の病気をなおす良医であり、良薬でありますが、多くの人達は、自分の心に病気があることを知らずに、のんきにすごしております。それは自分の心に痛みを感じないので、心の病気が進んでいることに気づかずにいるわけであります。また、たとい痛みをおぼえても、間違った宗教を信じたり、おまじないなどをして、ごまかして心の治療をすませたように思っているのであります。道元禅師は

仏道をならうというは、自己をならうなり。自己をならうというは、自己をわするるなり。

といわれています。このことは禅宗では独自の解釈があると思いますが、私はこのことばによって、仏法というものは、ハダカになって、自己の本性を知ると共に、人間の限界において、人生の危機と対決するところに、すなおな随順の心がめぐまれ、絶対界の風光に参徹することを教えたものであると領解しております。

このごろの人たちは、人間の限界を知って、自分の心に痛みを感ずることが少ないために、云いかえると、人間の

死や罪や無知の問題について、自分の心にたたかいを経験することが少ないので、心の空洞が大きくなっていることに気づかないままに、精神の病状は非常に悪化して、手のつけようもない状態になっているように思われます。

私たちが人間の限界を知り、人生の深渕に立つことは、さまざまな苦難に直面して、はじめて深くみずからをかえりみることになるのでありまして、源信僧都が「世のすみうきはいとうたよりなり」といわれたように、私たちは人生のかなしい苦難に直面して、心の痛みを感ずることが強いほど、本願の強縁（ごうえん）に接することができるわけであります。

わたくしは病後十七年、まことに恥ずかしい業さらしのひぐらしをつづけてきましたが、悲しい業苦のなかに、いよいよふかく仏さまのお慈悲のひろさと、人さまのごしんせつのありがたさを身にしみて感じとることが出来まして、今日まで生き長らえた甲斐があったと、しみじみよろこんでおります。そこで私は仏法に遇うたことをよろこび、みなさまと共に、あたらしい希望と勇気と愛情にみたされたひぐらしをつづけたいと、ひそかに念願しております。

昭和三十九年、初夏。　稿了。

○

薩摩の河野きよさんが遺書のなかに

「わたしはひとさまにかわりて、ぐどんな身なれば、なんぼ聴聞いたしても、ききおぼえもなく、ただこころにのこるものは、南無阿弥陀仏さまばかりなり」

○

山寺の鐘の音をきいて大きくなった桐の木は、音楽の琴の資材として、いちばんすぐれた音いろを出すといわれております。

また川のせせらぎの音を聞いて大きくなった竹で、尺八をつくると、非常にうつくしい音色をだすときいております。それにつけても、お念仏のこえを聞いて育てられるならば、必ずうるわしい音色がきけると思います。

○

昔、浄土の学者が、どうしても信心ができず、諸国を巡礼して、奈良の東大寺に参拝した。丁度本堂の改築中で、その日は上棟式があげられていた。大きな材木を沢山積みあげてあったので、これをどうして引き上げるのかと眺めていると、棟梁の指図で「ろくろ」をかけてかるやかに大木を引きあげた。それを見て、阿弥陀仏の善巧方便によって、愚かな私どもをお救い下さることはまことに容易であると思い知って、信心を決定することが出来た。

御一代記聞書抄（読・一〇）

井上善右ヱ門

皆人毎に善き事を言ひもし働きもすることあれば、真俗ともにそれを我がよき者にはやなりて、その心にて御恩といふことは打忘れて、我が心本になるによりて冥加に盡きて、世間仏法ともに悪しき心が必ず〳〵出来するなり、一大事なりと云々（第二二七条）

一

人間として、如何なる人にも共通する最も根深い迷いは我執であります。我執というのは自我意識の底に、真相に反する「我」の幻をいだき、それに執じる迷いであります。

この世のものすべては流れ遷り変ってゆきます。無常とはその真実相を示す言葉です。ところが人間はこの無常の中に生きながら無常に一致した生き方はしていません。老を厭い、病をにくみ、死を恐れているのが人間の現実です。そこに真実に違する矛盾が起り、その矛盾の故に悩みが生じます。意識の底に幻覚的なあるべからざる自己の影を描いて、その影の中に自己を閉じこめるこの我執は、人間が背負っている最も重大な心の病です。

もろ〳〵の煩悩というのも、この我執が根となって生じる妄情であり、自からより出でて自からを煩わし悩ますものですから煩悩といわれるわけです。自己中心の利己主義が如何にこの世を乱していることでしょう。自己中心の精神的エゴイズムはさらに大きな禍いの本です。これ等すべては我執の迷いに由来するものであります。

我執は意識の底に潜む形なき迷執ですから、意識の反省の手の届かないところで心を汚し濁し歪めます。ところが我々はこの事に気づかず、皮相な意識面で善い事をした立派な行いをしたと思い込んで自負するのですが、ここに大きな危険が伏在します。

二

「皆人毎に善き事を言いもし働きもすることあれば…」とは、人間は時として善き事を口に語り、善き事を身に行うことがあります。即ちそれは外に働く口業・身業でありますが、それは如何なるこころねで為されているかがより根本の問題といわねばなりません。

ところが「真俗ともにそれを我がよき者にはやなりて…」とあります。真俗とは、真とは真諦、俗とは俗諦の意ですから、仏法についても世事についてもといってよいでしょう。つまり世間仏法いずれの事にかぎらず、いささか善い事をすると、自分は善き者である立派な人間であるという思いがすぐ胸に生じ、それがやがて我れ識らず驕慢の心にその人を引きずってゆく。そうなると偶々善い行いをしても、その事に穢い染みがついてしまい、慢の煩悩を作り出す結果となってしまいます。

第一八九条に「善き事をしたるが悪き事あり、悪き事をしたるが善き事あり。善き事をしても、我は法義について善き事をしたると思い、我といふ事あれば悪きなり。悪しき事をしても心中をひるがえし本願に帰すれば、悪き事をしたるが善き道理になる由仰せられ候。然れば蓮如上人は参らせ心が悪きと仰せらるる」とあるのは全くその通りです。

人間の心に未徹ったものはありません。あるものは我情に汚染された意識です。その我執を越えるのは、本願の真実に帰するより外に道はありません。その本願が私のために用意されているという事は、何というおうけなき事でしょう。歎異抄に「ただほれ〴〵と弥陀の御恩の深重なること常におもひ出しまいらすべし」とあるのもその本願に帰する人の心に外なりません。

三

かえりみれば、たま〳〵善い事をするというのも、自分の気づかぬところに真実者の催促を蒙るからではありませんか。哲人カントも良心の声を我が声とは云わず「天来の声」と言っています。虚仮を離れたよび声は、自分を超えて自分を喚んでいる声を実感されずにはおられないからです。

「それを我がよきものにはやなりて、その心にて御恩といふことは打ち忘れて…」とありますが、自分がよきものになれば、自己が中心となりますから、己れを超えた真実の働きに浴して、その徳を仰ぐ御恩という世界は消え去ってしまいます。

「我が心本になるによりて冥加に尽きて…」我れが先に立ち我情にとらわれると、その途端に仏の真実の働きを遮ってしまうことになります。それが冥加に尽きるという事でしょう。冥加とは、自分に気づかれずに、仏の方より暗暗に加えられている徳の働きです。その徳をこちらから断ってしまい、冥加を失なってしまう。そしてその結果「世間

仏法ともに悪しき心が必ず〳〵出来するなり、一大事なり」とあります。我執は悪の根源です。我執が心を占領して根をおろすことは、もろ〳〵の悪しき思いや煩悩が増長する門戸を開くようなものです。そして折角、仏法を聞く縁に遇いながら、またむなしく迷いに流転する身となる。まことにそれは、人と生れた身の一大事と云わねばなりません。

我々凡夫には常にこの危険が潜みますが、真実の信心をたまわればたまわる程、この大事を知らしめられ、妄念は起っても常に仏智に立ち帰り、慚愧と共に悲心を仰ぎ仏恩に生かしめられる身となりましょう。善導大師が「念々称名常懺悔」と申されたのが偲ばれます。「一大事なり」という結語には深くこの誡めが感じられるのです。

慈母に別れ給いし人に

聚墨生

承りますと、御母堂様御逝去の由、謹しんでお悔み申し上げます。

段々とお淋しさも身にしみ、見るもの、触れるものにお追慕の情もいやまさることを遙察申しあげております。ものは失ってはじめてその尊さや重大さもわかると云いますが、父母の生前には何事もあたりまえと思っていたことの中に、大切なものを見落としていた慚愧が続きます。

然し、世間一般の別離は、遠ざかるとうとんじ、離れると忘れて行きますが、それに逆行して、父母とは別れてのちに、真実の親心に気づきはじめるものであります。私ごときは父と別れて五十幾年になりながら、事にあい、折にふれて父を憶う心が止みません。

こうした父母の縁によりまして、御生前よりも八百年後の今日、親鸞聖人をいよいよ仰ぎ、徳沢が地下水のようにうるおすことも、世の親、人類の父にましますからこそと渇仰し、念仏申させていただいております云々。

自照日誌抄（24）

西元宗助

六月のある日の夕刻、受信機が鳴りましたので手にすると、思いがけなくも、なんと武生・和上苑の木村無相さんの、じきじきのお声。まるで浄土からのおん呼び声のようで、嬉しかったこと、ありがたかったこと。

その無相さんからの長い手紙の中に、

ひと息
ひと息
如来の息

とありました。合掌しておしいただく。

○

先日は円山幼稚園の日野大心先生からのご招待で、仏教関係幼稚園・保育園の父母保護者のための月刊冊子、『ないおん』の執筆者が集まり、一夕ご馳走にあずかりました。そのときの大西憲明先生（龍谷大学教授、仏教保育の大家）の清談の一節

「小学校の一年生のころだったでしょうか。ねん土細工の時間に仏さまを造ったのです。それを家（寺）に持って帰ると、父がたいへん欣んでくれ、さっそく衣（ころも）に着かえて、その仏さまを御仏壇に安置し、お経をあげて拝んでくださった。これは子供心にもジーンとひびきました」と。

仏教童話の花岡大学先生も、末席の麗人・岡部伊都子女史も、感じ入って聞いていられる。レディーファーストということで、みんなが伊都子さんに上席をすすめましたが、末席を固守して頑として応じられない。そのお声の涼しく清らかでおありだったこと。

その席で、なんのお話からか、東井義雄先生（東井義雄全集十二巻あり）が、『ないおん』の短い文章を書くのにも、たいがい二十回は書き直しますとおっしゃる。それを聞いていた編集責任者の丁野さん、目をうるませて頭をさげて

おられる。わたしもハッといたしました。

○

六月は青森での同朋大会や、北海道での真宗十派連合（ご僧侶）研修会に招かれたりしまして案外忙しい日々でありました。

七十一歳の誕生日の深夜、これを認める。この年まで生かさせていただいたことを感謝しつつ

（昭和五五年七月一日稿了）

○

芭蕉のことば

造化に随いて四時を友とす。見るところ花にあらずということなし、思うところ月にあらずいうことなし。……造花に随い造化に帰れとなり。

○

松の事は松に習え、竹の事は竹に習え、と師のことばのありしも、私意をはなれよという事なり。

○

古人の跡を求めず、古人の求めたる所を求めよ、と弘法大師の筆の道にも見えたり。

信心のうた

良寛師

われながら嬉しくもあるか弥陀仏のいますみくににゆくとおもえば

不可思議の弥陀のちかひのなかりせば何をこの世の思い出とせむ

行誡上人

鷲のやま高根にのみとききしかど　我が軒端にもありあけの月

臼杵祖人先生（最後の病床にて）

一息は一息ごとに死の巌頭　こゆるみ声は六字名号

いざゆかん生滅々已常楽の御親の里の花のうてなに

住田智見講師

念仏にてまいりたまいし父母の御あとをふみてわれはゆくなり

清水凡禿居士（辞世）

大願の舟はあはてる要もなしゆられるままに風のまにまに

安波勲八医師

世の事はゆかりの人にうちまかせ誓の船に乗るぞ嬉しき

念仏詩抄念

木村無相

ああ　わが善知識は

香師おおせに　　香師＝香樹院徳龍師

〝仏法聞いてはおれども

心が仏法にならぬことを

何とも思わぬ——

そのゆえは

善知識の教えを

真実尊きことを思われぬゆえ〟

善知識ぬきでは

御法は聞こえぬ

ああ　　善知識

善知識　善知識

ああ

わが善知識は

親鸞聖人さま——

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

第一のだまし手

香師おおせに

〝だますものは

世に多けれど

第一のだまし手の

悪者が我が心——〟

わが心

われをだまして
得た〳〵と
信者がおして
ハナモチならず

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

真宗で「無我」とは

香師おおせに
〝無我になれ〳〵と
おおせられて
我慢の心根が強くては
実の法は知れぬぞと
おおせられる——
へりくだりて
よく〳〵聞かれよ—〟
無我になれ〳〵との

ことなれど
真宗に無我とは
われにネウチ無しとの
ことなるか——
ネウチ無ければ
おのずから
へりくだらるる——

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

人界に生れし果報

香師おおせに
〝念仏申す身になりた
人界の果報を
喜ぶべきこと——〟

人界に
生れし果報

今知りぬ
ナムアミダブツの
智慧に照らされ

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

わたしの親さま

香師おおせに
〝念仏の行者ほど
よき親を持った者は
ないほどに——〟

わたしの親さま
どこどこまでも
お見のがしがない
お見すてがない
念仏行者でない
わたしでも——

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

ひと息

（近詠）　六月廿一日

ひと息
ひと息
如来の息
われは如来に
あらざれど
如来はわれに
息したもう

その如来こそ
無量寿如来
ああ
如来よ
わが息よ

疾病と信仰(3)

花田正夫

看護者の苦悩

ガンセンの看護婦さんが「快復の道のない患者さんの看護は一番苦しい」との訴えがあった。このことは数年前に某医師からも質問をうけたが、近親者に不治の病人を持つ者にも深刻な悩みである。

私自身、岡山医大に入学した早々に、父を亡くした。次次と医師から見放されて、医大の内科の教授を招いて診察をうけたが、施すすべはないとのこと。それでも、一寸病人の調子がよいとたすかるのではなかろうかと思い、悪いと矢張り駄目なのかと、一喜一憂を繰返していた。

その時、病はよくならなくても、せめて何とか父を慰める道は無かろうかと、あれこれとやって見たが、かえってそれが父を苦しめる結果になった。とうとう病床に居たたまらなくなって、裏庭に逃げ出した時、フト歎異抄の四章の親鸞聖人のお言葉が思い出られた。

「慈悲に聖道・浄土のかわりめあり。聖道の慈悲というは、ものをあわれみ、悲しみはぐくむをいう。しかれどもおもうがごとくたすけとぐること極めてありがたし。浄土の慈悲というは、念仏していそぎ仏になりて、大慈大悲心をもて、おもうがごとく衆生を利益するをいうべきなり。今生にいかにいとおし、ふびんとおもうとも、存知のごとくたすけがたければ、この慈悲始終なし。しかれば、念仏もうすのみぞ末通りたる大慈悲心にてそうろうべきと、云云。」

そこに、人間の力の限界を教えられると共に、そのどうともしようのない身をたすけとげようために御苦労下さる本願を仰いで、念仏にかえらせていただくと、不思議に行き詰った心の底が抜けて、再び父の枕頭に帰って、其時、其時にせねばならぬことをやらせてもらえるようになった。天命を知って人事を尽す、という道が開けたのである。

次に、私が医大の三年の夏、愛媛県の宿毛に兄を訪ねた。

ところが兄の幼い子が脳膜炎になって、病状は落着いていたが、後遺症として全身のひきつけを繰返していた。宿毛の医師も、いのちはくいとめたけれど、脳に故障がのこるとの診断であった。勿論私は為すすべもなく空しく日を過ごしていた。或夜更け、目をさますと、姉は所謂、丑の刻参りをして、子の平癒を祈っているのを見た。もとよりそうした信仰の空しさはよく知っていたが、病む児を持つ母親の切ない心に対して、何とも云う言葉がなかった。

そうした或日の午後、八十八ヶ所廻りの巡礼が門に立って、賽の河原の和讃を唱えはじめた。

「これはこの世のことならず、賽の河原の物語り、聞くにつけてもあわれなり。一重積んでは父のため、二重積んでは母のため、三重積んではらからや云々」

と。すると姉は、泣き伏してしまった。そこで

「姉さん、あの御詠歌をどうきいたのでしょうか。私共もこの子と同じで、毎日石積みをしているが、やがて日も暮れあいとなると地獄の鬼があらわれて、それを皆崩してしまう。そこに泣き伏すばかりであるが、幸にも地蔵菩薩が寄り添うて下さって、温かい懐に抱きとって下さる。そのように、苦悩の私共のために仏様が大悲の御手をさしのべて下っていることを教えられるではありませんか」

と話すと、姉はまた一入強く泣きじゃくって、しばらくすると、はじめて「仏様のお心がありがたい」と明るい顔に転じて行った。

そこに、浄土の慈悲の行き詰りのない徳光によって、私共の限りのある力ではいたるところに厚い壁につき当るほかにないのに、その壁を破って越えさせて下さることを私自身に、強くあらためて知らされたのであった。

おもうに、善財童子は、内外のあらゆる事象を師として、それぞれに尊い教えを見出していられるが、そうなるにはいつも影の形に添うように、仏智の権化の文珠菩薩が寄り添うていられる。私共は智目なく行足の無い足であるが、その故にいつも御一緒して下さる阿弥陀仏が、或は燈炬となり、或は願船となって、生死の大夜を照らし、生死の大海を渡して下さるのである。

私共はかくて、不治の病人に接するにつけ、わが身の小慈小悲もないことを省み、未通る仏の大慈悲に支えられて、自分に出来るだけのことをやらせてもらうばかりである。そこに病人に仕えることがそのまま仏に仕えることになるのである。釈尊も、病人につかえることも、仏につかえることも同じ徳である、と云われている。

愛別離苦に際して

或時、一人息子を亡くした医師が、その夫人の悲しみを

慰めようもないので、何か聞かせて下さいとの招きをうけてお悔みに出掛けた。

その時、最初に思い出したのは、白井成允先生の聞法録にある、菅瀬芳英和上の御悔みの言葉であった。

○

私（白井先生）は一人の親友とともに、或る若き母君の御伴をして、その母君の稚き御児の御遺骨を火葬場からお迎えもうしてその御宅に帰ってきました。御内仏様の御側に御骨函を安んじ香華をたむけた時涙が流れました。その母君とその御老母君とははげしくいつまでも〳〵お泣きになりました。

その座には私共の他に一人の御僧がお悔みに来ておられました。その方は断えずお念仏を称えておられましたが、突然このお二人に向ってこう申されました。

「泣くがいい、泣きたいだけ泣いていなさい、泣けばいくらか悲しみの遣り場もあろう。泣くより他に悲しみを晴らすこともできなかろう。お泣き、心のゆくまでお泣きなさい。

けれどもな、あなたがたの涙はじきに乾いてしまう。もうじきに泣けなくなってしまうほど、薄情だけれどなそれで、それを見抜いて下さる親様の御涙は乾くときがないのだ。いつまでも私達のために泣いて下さるのだ。だから、その親様の涙を想うてな、お念仏もうしなさいや。

せいぜいお念仏もうすのだ、泣きたかったらお念仏もうす、泣けなくなったらやはりお念仏もうしなさいや。

そんなにしてお念仏もうすのは自力の念仏だからいけない、などと理窟を言うのじゃないぞ、自力の念仏だと云われても何でも宜しい、ただお念仏もうさせて参らせて下さる親様の御涙なのだから、そのままでお念仏もうすのだ。それが何時の間にか他人のお念仏であると知らされてくるから、お念仏もうしなさい、凡夫の涙ははかないから、親様の涙に帰らせて頂くばかりでな。南無阿弥陀仏々々々」

御僧はこう言ってお念仏を高らかに称えておられた。

○

次に心に浮んだのは、道綽禅師が安楽集に、智度論から引用された譬喩であった。

「譬えば二人ともに、父母眷属の深渕に没在するを見るに、一人は直ちに往いて力を尽してこれを救わんとするに、力及ばざるところなれば、相いともに没す。一人は遙かに走って一つの舟船に赴き、乗り来って救済するに並びに難を出ることを得るごとし云々」

そこで、一人一人がこの願船にのせていただくことが大切で、それ以外に光はないことを語り合った。

その後、数年して、私自身が、母と兄二人とを続けざまになくしたとき、さすがに愛別の涙に沈んだ。そして

恩愛はなはだたちがたく　生死はなはだつきがたし

念仏三昧行じてぞ　罪障を、滅し度脱せし

の御和讃を誦しながら、お念仏させていただいているとき、フト省みさせられたことは、母が死んだ、兄とも別れたと悲しんでいるが、やがてこの涙も消えて行く。私が可哀想だ、悲しいといくら思って見ても、それ以上は出られない。こうした世に、ただお一人、仏様ばかりが、人生の無常のことわりを知られて、御思惟と御修行を積まれて、その生死の海を越える道を成就され、私共をものこらず救いとげようと、お念仏となって救いの綱をさしのべて下さっていることを想い、それにくらべると私共の悲歎の心はまことに浮調子なものであり、しかもつらい悲しいだけで、そこを越えることはどうしても出来ない身をかえりみて

愛別のかなしみ深しふかけれど

わがみほとけの涙きわなし

と讃仰申すばかりであった。

信友の林田英夫さんが、或時、

「母が胃ガンで病床に伏せており、自分も医師として出来る限り病床を訪ねていたが、何分にも病気に気づいたのがおそく、手術も出来ない状態で、いたましい限りであった。

ただ、さいわいに、母もお念仏申す身になっており、自分もお念仏を申しながら、母をみとることが出来た。今生夢のうちのしるべであったが、来生さとりのまえのえにしを、お念仏の中にいただいて浄土の再会をたのみにして別れることが出来た。もしお念仏がなかったら、暗い渕に沈むばかりであった云云」

と感慨深く話してくれたことも、忘れ難いものである。

むすび

以上、不治の病、死につながる病、更に、看護者の問題と、愛別の哀しみについて申し上げたが、所詮は、そうしたことによって、自分自身のどうしてみようもない身を省み、而も、よき人々が、この苦懐をよく理解して下さって、

「ただ念仏して弥陀にたすけられましょう」

「念仏申すのみぞ末通りたる大慈悲ですぞ」

「ただ念仏のみぞまことにておわします」

と、異口同音に、救いの綱を投げかけて下さっている。その仏のお慈悲に、行き詰った自分自身の心の闇が破られて、超えさせて頂けることは何と深い御恩であろうか。

あとがき

長い梅雨もあけて三伏の夏となりました。この月は広島と長崎に原爆がおとされ、やがて十五日には敗戦となりました。あれから三十五年もすぎましたが、瞑目すればありありと惨状が浮かびます。

俚言に「地獄への道は美しき理想の花で飾られている」と申しますが、誰しも平和を願いながら戦争におちる現実の歴史、矛盾した人間存在のどうにもならぬ傷ましい姿であります。それも無明渇愛の煩悩の所為と知らされながら、その始末のつかぬ身に、唯一つさしのべられた大悲の御手ましまして、つまずき乍らも白道にかえらされ〳〵して、岩もあり木の根もあるまんまそれを越えさせて下さるのであります。

この月は、近角常音先生の御忌月でありますので、吉田様の筆録と、私の聞き書きを掲げさせていただきました。常観先生御在世中は、手となり足となりれて法灯を掲げて下さり、戦後混迷の世に立たれて、種々な人生問題にこたえて下さいました洪恩をあらためて仰いでおります。

池山先生は、歎異抄の二章の「親鸞におきてはたた念仏して弥陀にたすけられまいらすべしとよき人の仰せを蒙る」点を力強くおのべ下さいました。

高千穂師の一文は、喉頭ガンの手術で、一声の念仏も申すことの出来ぬ身になられての法味であります。自分は健康な積り、自分はよい積りで、油断していることの空おそろしさを教えられました。

井上様、西元様は御多忙の中に信味をお頒ち下さいました。御礼の言葉もなく、いつも尾崎放哉の一句、「容れものがない、両手でうける」を誦しながら記載させていただいております。

木村さんの念仏詩の最後の一句は、最近の不整脉の続くなかからのもので、お手紙の中から私が勝手に転載させて貰いました、御諒承願います。

「歎異抄—わが身読記」を、定価二千円に改めて第三版を出して下さる由であります。。

発行所、東京都文区千駄木二—八—三。
柏樹社
振替・東京〇—三三七二四番

〇

九月の修道会は五日に変更

〈御案内〉

〇毎月第一、第三日曜、午後一時半
一道会例会。一道会館の南隣り、
南区駈上町二の八六。鬼頭康彦氏宅
市バス、新郊通り一丁目下車、東入ル三筋目、角。
地下鉄、新瑞橋終点下車。

〇教西寺、法話会。昭和区小桜町二丁目四
毎月二十四日、午前・午後。
市バス、御器所通り又は北山下車。
地下鉄、御器所通り下車。

〇蓮光寺修道会。毎月七日午後一時半。
（但し日曜を除く）尾西市三条板倉
名鉄新一宮駅よりバス、西三条下車。

定価　半年　七〇〇円（送共）
一年　一四〇〇円（送共）
編集・発行人　名古屋市南区駈上町二ノ八八　花田正夫
電話八二一局七〇三七番
印刷人　愛知県西加茂郡三好町大字福谷　坂部光雄
発行所　名古屋市南区駈上町二ノ八八　慈光社
振替口座　名古屋一〇四七〇番
郵便番号　四五七

慈光　第三十二巻　第八号　昭和五十五年八月十五日発行（毎月一回・十五日発行）
昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可